# 特別史跡 大野城跡 Ⅲ

主城原地区発掘調査概報・整備概要(1)

1979

福岡県教育委員会

# 正誤表

誤

正

○ P14図版 7.

C地区の遺構(東から)

C地区の遺構(北から)

○ P27 1. (1行目) 大野城水域口城門跡

大野城水城口城門跡

○ P25 買収負担割合は本表に訂正致します。

国	庫	県	費	町	費
補助額	率	補助額	率		率
9,380,280	80	1,758,802	15	586,268	5
14,573,840	80	2,732,595	15	910,865	5
39,800,800	80	7 ,462 ,650	15	2,487,550	5
62,964,080	80	11,805,765	15	3,935,255	5
126,719,000		23 ,759 ,812		7,919,938	
		158 ,398 ,75	0円		

# 特別史跡 大野城跡 Ⅲ

主城原地区発掘調査概報・整備概要(1)

昭和54年福岡県教育委員会

# 発刊のことば

この概報は、特別史跡大野城跡の環境整備の基礎資料を得るために、福岡県教育委員 会が国庫補助を受けて実施した発掘調査の概要と環境整備の概要であります。

発掘調査及び環境整備にあたっては、指導委員の先生方には多くの御助言をいただき, また地元の方々には終始御協力いただきましたことに対し,深い感謝の意を表します。

昭和54年3月31日

福岡県教育委員会 教育長浦 山 太郎

## 例 言

1 本報告は、特別史跡大野城跡における主城原地区での昭和52・53年度の発掘調査の記録および整備概要である。

第1次調查 昭和53年 1月17日~3月8日

第 2 次調査 昭和53年 8 月22日~10月31日

発掘調査面積 約665㎡

2 本調査の関係者は下記のとおりである。

調査主体者 福岡県教育庁管理部文化課

藤井 功(課長)

宮本貞行(文化係長)

武久耕作(課長補佐)

芳沢 要(主査)

豊福金満 (主任主事)

磯村幸男 (技師)

調査担当者 九州歴史資料館

渡辺正気 (学芸第二課長)

横田義章(主任技師)

石丸 洋(主任技師)

調査補助員

関 晴彦

調查協力者 福岡県林務部緑地推進課

宇美町教育委員会

- 3 本調査にあたっては九州芸術工科大学沢村仁教授に御指導を受けた。
- 4 本報告の執筆・編集は横田、芳沢が担当し、写真は石丸が当った。 なお、遺構図の製図には芦塚照子の協力を得た。
- 5 発掘調査にあたって、地元四王寺部落の御協力を得たことを感謝する。

# 国 次

# 発刊のことば

Ι	大	、野城とその遺跡	1
Π	Ė	E城原地区の調査	3
(1	()	建物跡	3
(2	2)	出土遺物	9
(3	3)	小 結	14
Ш	環	J境整備······	16

# 挿 図 目 次

第1図	大野城跡地形図
第2図	調査地区周辺地形図と建物配置図4
第3図	SB064·065掘立柱断面図·····5
第4図	SB060 · 061 · 062 実測図······ 6
第5図	礎石建物・基壇断面図
第6図	SB064・065・068 実測図8
第7図	軒先瓦・面戸瓦拓影, 実測図10
第8図	平瓦・丸瓦拓影, 実測図12
第9図	SB064・065柱穴出土瓦の叩き痕など拓影13
第10図	須恵器実測図14
第11図	特別史跡大野城跡の整備進行状況図折り込み
	図 版 目 次
図版 1	<b>発掘調査区全景</b>
図版 2	(上)発掘調査前全景 (下) 発掘調査後全景
図版 3	(上)発掘区礎石建物 (下)SB060北基壇西北隅
図版 4	(上)発掘区礎石建物全景(下)同上
図版 5	(上)SB061北側基壇とSB062礎石(下)SB061東側基壇とSB062礎石
図版 6	(上)SB060・061礎石掘方とSB062礎石(下)同上
図版 7	(上)SB061東南部の基壇縁(下)SB060礎石掘方及びSB062礎石
図版 8	(上)SB063礎石建物(下)SB063の南側柱列礎石と雨落
図版 9	(上)SB064・065・068掘立柱建物全景(下)SB064・065・066・068建物
図版10	(上)SB064·065掘立柱断面(下)
図版11	(上)SB066礎石建物全景(下)同上
図版12	(上)SB063礎石建物全景(下)SB063下層遺構検出状況
図版13	主城原地区出土軒丸瓦
図版14	主城原地区出土軒丸瓦
図版15	主城原地区出土軒丸瓦・道具瓦
図版16	主城原地区出土丸・平瓦、須恵器
図版17	(上)礎石建物跡基壇保全工(下)同上
図版18	(上)説明板(下)階段工

# Ⅰ 大野城とその遺跡

大野城 大野城は、福岡市南東部の大野城市、筑紫郡太宰府町、粕屋郡宇美町の三市町にまたがる通称「四王寺山」(四王寺山塊、古くは大野山と呼ばれた)に7世紀中葉に築かれた広大な山城である。

天智天皇2(665)年、日本と百済の連合軍は朝鮮半島の白村江に会戦し唐・新羅の連合軍に敗れた(『日本書紀』天智条)。那の津(現福岡市大橋付近か)にあった「官家」(みやけ)を内陸(現在の太宰府町)に移し「大宰府」としたのはこの会戦前後のことであったろうし、敗戦後、天智3(664)年には大宰府と那の津との間に「水城」を、またその翌天智4(665)年に大宰府背後(北方)と南方に山城を築いた。この大宰府背後の城が「大野城」であり、南方のそれが基肄城である。この三城は博多湾方面からの新羅勢力の侵攻に備えて設計された一連の長城であり、大野・基肄築城は百済の高官2名に命じられた。

その規模は盆地状の谷を中心部に含んで四王寺山塊の峰々を 6 km余に及ぶ土塁で囲み, さらに北 (宇美・博多方面) と南 (太宰府方面) を二重土塁として堅固にし, 河谷部は石塁としている。

大きな石塁としては百間石垣、大石垣などが知られている。

城門は4ヶ所あり、城内の施設としては建物・井戸などがある。建物は現在その礎石に名残りを止めるものが多い。60数棟分が確認されているが、ほとんど倉庫のような建物と考えられる。水門は最近屯水で1ヶ所見つかっているが詳細は検討中である。

大野城は奈良時代末から四天王を祀り鎮護国家を祈るようになるが城としての機能は、貞観 18 (876)年の類聚三代格の史料の限りではこの時点でなお維持されていることは明らかである。 したがって大野城の城としての役割りは7世紀の半ばから9世紀の後半まで 200年以上保たれていたことがわかる。

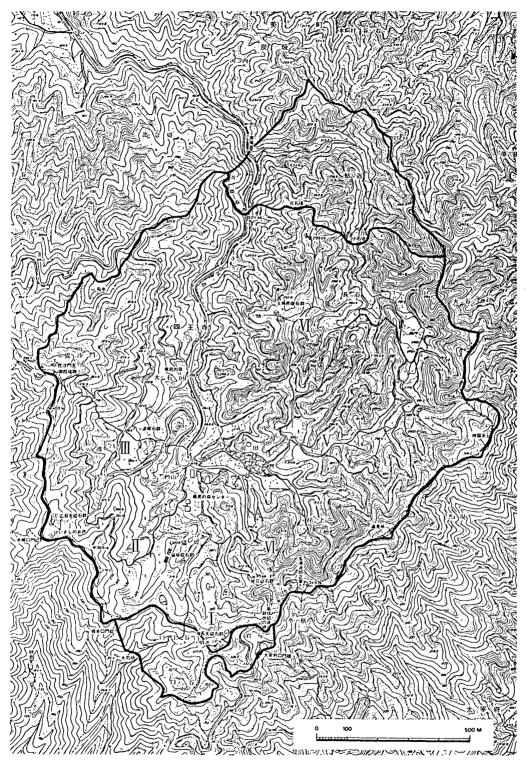
大野城の地形は西方の毘沙門天を最高所(410m)として南・東に峰が連り、それらの内から 北方に四王寺川が谷を刻み流下する。土塁線が四王寺川とぶつかる場所に百間石垣が築かれて いる。

この大野城の跡は昭和7年史跡に指定され、同28年特別史跡に、同51年追加指定され現在特別史跡指定地面積は330 haに及んでいる。

環境整備は建物跡を中心に、昭和46年度から実施され、尾花・増長天・八ツ波・猫坂の各建物跡、百間石垣・大石垣の保全工事などを行ってきた。

これまでの調査研究, 大野城跡の調査研究は大正時代の島田寅次郎らの調査がまずあげられ

註1 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第2輯(大正15年)同第6輯(昭和6年)



第1図 大野城跡地形図

Ⅰ増長天地区 Ⅱ循坂地区 Ⅲ八ツ並地区 Ⅳ主城原地区 Ⅴ村上地区 Ⅵ尾花地区

よう。その後昭和27年ごろから鏡山猛らによって更に詳しい礎石群や土塁などの確認が続き,(2) 『大宰府都城の研究』に集成された。昭和44年以降福岡県教育委員会が環境整備・発掘調査を行うようになり現在に及んでいる。

発掘調査は次のように行われている。

昭和48年度 增長天地区礎石建物(4棟) (九州歷史資料館年報 昭和48年度)

- 〃 49 〃 百間石垣(同上 昭和49年度)
- 〃 50 〃 大石垣

八ツ波地区礎石建物の分布調査 (一部発掘)(『特別史跡大野城 跡 Ⅰ』昭和51年)

〃 51 〃 八ツ波地区礎石建物(14棟)

猫坂地区礎石建物(4棟) 掘立柱建物(1棟)(同上Ⅱ昭和52年)

- v 52 v 主城原地区礎石建物(6棟)掘立柱建物
- ∞ 53 ∞ 主城原地区建物(3棟)

# Ⅱ 主城原地区の調査

**主城原の位置** 主城原は大野城跡の中央部北寄りにある平坦面の比較的多い尾根の部分で、 北に下ると「北石垣」に至る。

城内を南北に貫通する四王寺林道から、四王寺部落で東に入り、部落の裏側から山道を登り、 左に道を採って登りつめた一帯が主城原である。

発掘調査はここに散在するいくつかの礎石群のうち、城内で(土塁線を除いては)北方への 眺望が最も良い、4棟分の礎石群のある地点について実施することとした。4棟分のうち、中 央部の一段と高い場所の一棟分の礎石群について全面調査を行い、他の3棟分については周囲 の雨落ちなどを確認するため部分調査をすることとした。

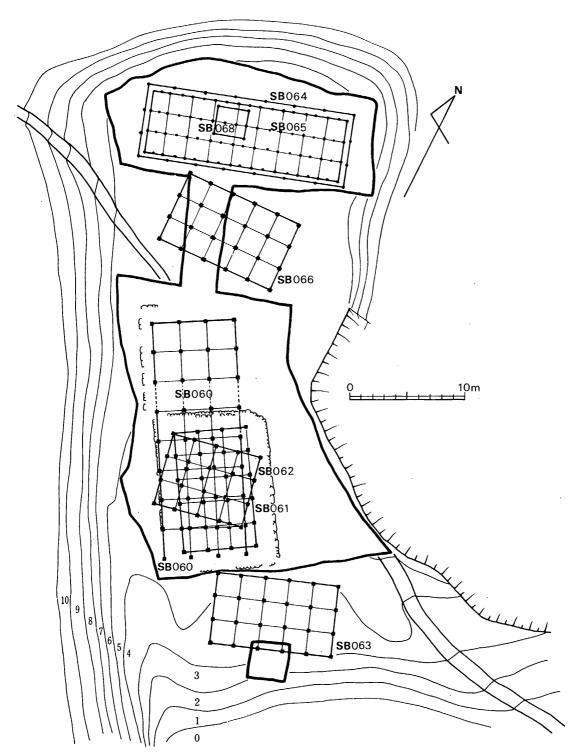
調査が進むにつれ、高い場所の礎石群のある場所は、基壇をもつ建物が数回建て替えられており、また尾根の先端部には掘立柱建物が2回分程、重複していることがわかった(第1次調査)。そのため、第2次調査として、その基壇部分と北方礎石建物(SB066)までの間の平坦部と北方、尾根の先端部を全面的に調査することとした。

遺構は表土と、その下の黄褐色土を排土して地山面で検出した。基壇建物に盛り土をしている以外整地層はなかった。

1. 建物跡 (第3図~第6図, 図版3~12)

SB060 この建物は推定約70cm程の高さの基壇の上に建てられた、礎石総柱建物(南北棟)である。この建物の上層に更に二時期分の建物跡があるために、北部を除いて一部分だけしか調査し得なかったので不明点が多い。3間×8間分を検出したが、8間以上になる可能性もある。

註2『大宰府都城の研究』(昭和43年)



第2回 調査地区周辺地形図と建物配置図(太い輪郭内が発掘調査地区)

またこの建物の北部の2間分は上面部の削平がかなりなされているため、SB061 などと重ななる部分と同一建物として扱うべきかどうかについては若干の問題もある。が本稿では1棟分の建物と考えておく。柱間寸法は梁行240cm,桁行約256cmで,地山の高い部分を基壇として使っており、基壇縁は石積である。今回の調査部分が少ないので,細部については将来資料が追加された折明らかになろう。

SB061 SB060の南半部の基壇を利用した礎石総柱建物(南北棟)で,3間×5間,柱間寸法は210㎝等間である。基壇は,SB060のそれに版築によるかさ上げをし,基壇縁は石積で四周共よく残っている。特に東縁は見事である。側柱と基壇縁との距離は180㎝程である。

この建物の北側基壇縁中央部に石積の状況が他と若干異る場所があるが,これは階段の痕跡 であろうかと考えられる。

SB060の北部分の基壇は、このSB061建築に際して削平されたものと推定できる。

SB062 SB061を廃絶して作られた礎石総柱建物(東西棟)で3間×4間,柱間寸法は梁行210cm,桁行195cmである。基壇縁などは残っておらず,またSB061 の基壇上にかさ上げをしたものと推定されるが、それはほとんど残っていなかった。

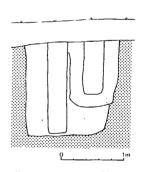
SB063 SB062の南に接する礎石総柱建物(東西棟)で、3間×5間、柱間寸法は210cm 等間である。礎石はすべて残っているが総じて小さい。南の側柱部に山の斜面が迫る位置で雨落ちを確認した。この部分は旧斜面をかなり削平している。

SB061の廃絶後に建てられており、SB062と併存した可能性がある。

SB064 尾根北端部の最も古いもので、掘立柱建物(東西棟)である。大野城跡では初めて見つかった、本格的な「倉庫風でない」建物で、3間×7間である。

尾根巾一ぱいに梁行6.70m 桁行17.90 m の規模の建物を作っている。掘方は大きく、深く、その埋土は大変硬くしまっている。この掘方埋土には、土器、瓦などは全く発見できなかったが柱穴には、その多くのものに格子目叩き文やそれを磨り消した瓦が発見された。また単弁の完形瓦当も1点ある(次項「遺物」参照)。

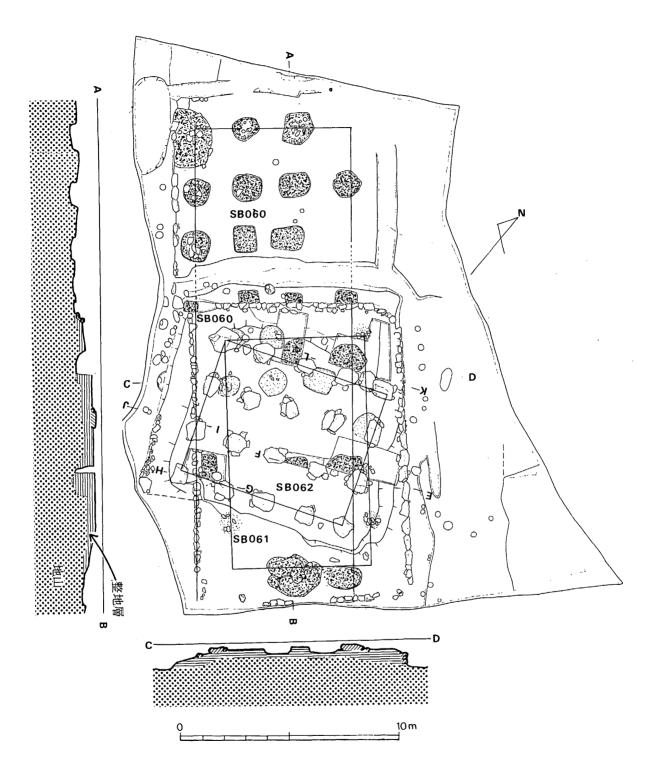
SB 065 SB 064建物と同位置に同方向で, 規模を縮小して作った掘立柱総柱の建物で, 梁行5.35m (3間) ×桁行 15.20m (9間) である。



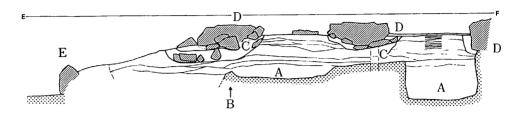
第 3 図 SB 064 · 065 掘立柱掘方断面図

柱間寸法はやや不揃いながら柱筋はそれぞれの単位では通っている。掘方はSB 064より小規模である。

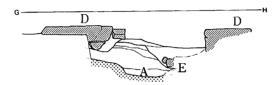
この掘立柱の桁方向の掘方間に小さな円形柱穴があり、これはSB065 とは別の建物かとも



第4図 SB060・061・062実測図 注:断面図の基準線はSB062の西北隅礎石面+20cmである(以下の図も同様)







# 凡例

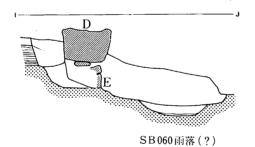
A SB 060 礎石掘方

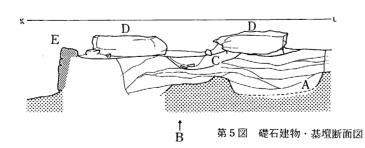
B SB 060 基壇縁部

C SB 061 礎石掘方

D SB 062 礎 石

E SB 062 基壇縁





考えられたが全体規模に比して柱穴が小さいので、SB065の束柱など何らかの付属施設なのかもしれないと推定している。

この掘立柱建物の掘方埋土でも遺物は検出できなかったが、 SB064 同様柱穴からのみ同様の瓦を検出し、うち1点軒丸瓦の瓦当部のはずれた丸瓦がある(次項「遺物」参照)。

SB066 SB064・065 の南に、以前から礎石が見えていた総柱建物(東西棟)で3間×5間、柱間寸法は 210 cm等間である。礎石上面から考えると当初の建築面は全く失われている。雨落ちは明瞭ではないが北側の不整な溝がその名残りであろう。SB065 廃絶後の建物である。

SB067 これまで述べてきた、いくつかの建物のある尾根の北端近くから西に延びる支尾根の先端にある3 間imes 5 間の礎石総柱建物で柱間寸法は 210 cm等間。大野城の礎石のうちでは最大級のものを使用した建物である。

建物の東側を小トレンチで調査したが、雨落ち部で掘立柱を検出した。大野城跡でのいくつかの調査例と同じく、建物の周囲を掘立柱が廻っている建物であることを確認した。

なおこの建物より後の時代の円形石組遺構を1ケ所検出した。出土遺物もなく性格は不明である。八ツ波地区での発見遺構と似た性格のものかと思われる。

SB068掘立柱建物のある尾根北端の中央部に検出した小さい掘方の1間×1間の掘立柱建物で柱間寸法は 240 cmである。掘方は径に比べて深い。簡単な櫓状の建物かと推定される。 SB064・065 との前後関係は確定できなかった。

註 「主城原」という名称

じょう が はる

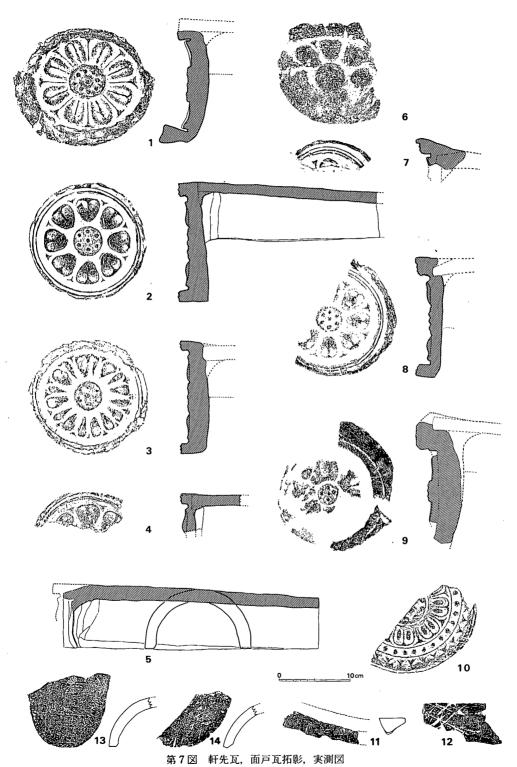
主城原という地名はそれほど古い名称ではないらしく、地元では城ケ原と呼んでいたらしい。かなり高い広い場所であったからであろう。地籍図での字名は「大石垣」であるがこれは大変広く、現在主城原と呼んでいる場所の範囲を越える。そこで現在では呼び慣わされている「主城原」を今後も地名として使用したい。ただし、史料に散見する「主城」と関連づけての名称ではないことを強調しておく。

#### 2. 出土遺物

**瓦類** 瓦は調査地域全域で多量に出土したが、調査地南半の基壇周辺に圧倒的に集中しており、特に第Ⅱ期基壇の外縁部には約30cm程の堆積層が見られた。

第Ⅱ期基壇の外縁に堆積している瓦は、平瓦は縄目の叩文をもつもの、丸瓦は玉縁のあるものに代表され、これらは灰色、黒灰色などの若干の格子目の叩文のある平瓦、行基葺の丸瓦なども交えていた。これらは、また基壇の列石、版築中にも、格子目叩文、縄目叩文などを交えていた(第8・9図)。

掘立柱と礎石建物跡がある調査地北半では、平瓦は縄目叩文と格子目叩文の両者が出土したが、縄目叩文がやや多く、丸瓦も玉縁、行基葺共に見られた。



2 +1702C, m/ 201499, 7

特記すべきは掘立柱建物SB064・065共に、掘方の埋土には全く遺物が含まれていないが、 柱穴から瓦が顕著に出土することであった。この瓦は縄目の叩文を全く交えず、格子目叩文、 およびそれを消したと考えられる平瓦と、凹面にのみ布目を残す行基葺の丸瓦である。

(1)軒丸瓦 軒瓦は全部で約20点出土した。軒瓦のうち軒平瓦は, 瓦当文様のわからない顎の破片が1点あるだけである。単弁軒丸瓦は4種類14点,複弁軒丸瓦2種類5点であった。単弁軒丸瓦は, SB060北半からSB064までの間に多く発見された。

**単弁** I 類(第7図1図版13の1)8弁で中房が大きく1+8の蓮子をもつものである。個々の弁がはっきりしていて弁に稜が通り、間弁も中房まで極めて明瞭に達している。粗い作りの平縁で、全面になで痕がある。丸瓦を瓦当部上部に載せて接合しており、瓦当部の接合部には、接合のために丸瓦端部に入れた、斜格子目刻み目が写されて凸線となって残っている。丸瓦を載せて作っているためであろうか瓦当は円形でなくかなり楕円状につぶれている。全体の作りは厚く、裏面下端部は丸味をもっている。縁の張り出しが上側より下側が大きく、文様部に比して、他の作りが粗い。この瓦は、SB064・065の柱穴重複部から出土した。第7図12の丸瓦は内面に斜格子状の刻目があるので、I類の瓦の瓦当がはずれたものかもしれない。

単弁Ⅱ類(第7図2.3.4.図版13の2,14の1)8弁で中房に1+6の蓮子をもつ。弁がやや三角形状で平面的である。二重圏の縁をもつものの他、平縁が1点ある。間弁は小さく、あまり目立たない。下端など断面形は丸味はなく直線的である。丸瓦との接合は丸瓦の端部を削って差し込んだもの(第7図5)と、ただ瓦当裏面に押し当てたものとがある(第7図2.3.4)。第7図5は、軒丸瓦の瓦当部の剝がれた行基葺の丸瓦で差し込みする際の整形や、接合の際の補強の状態がよくわかる。SB065の掘立柱柱穴から出土した。

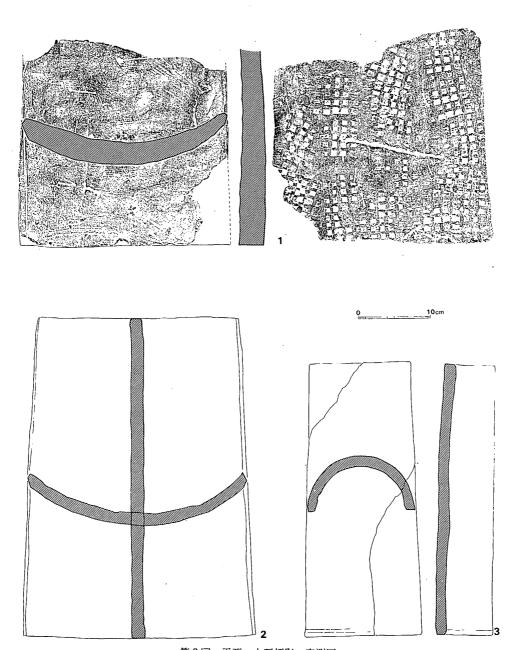
第7図3は, 2型への粘土の押し直しのために弁が2分され, あたかもごく小さい単弁状になってしまったものである。

単弁Ⅲ類(第7図6.7.8.9.図版14の2.3)8弁で中房は1+6の蓮子をもっている。 [[類と 文様はもっとも似ているが、 [[類と比し間弁がやや大きく、そのためか弁端も円味をもってい て、弁の立体観がある。2重圏で、裏面などの作りは円味のある断面形で、 [[類と近い。補強 量には個体差が大きいようである。発掘調査で出土した中には好例がなかったので第7図8図 版14の3)に主城原の近くの前田地区から採集されているものを図示した。

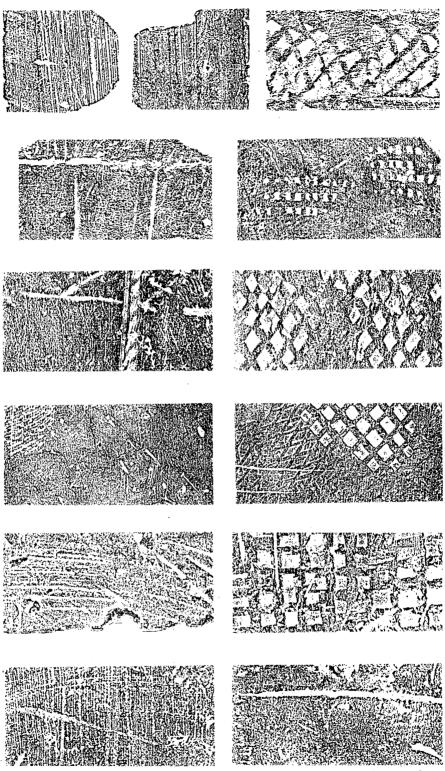
**単弁N類**(第7図・9図版15の1)8弁で中房には1+4の蓮子をもつ。出土したものは1点で、微細な破片を接合したが、それとわかる程度の文様しか残っていない。瓦当上部に段をつけて丸瓦を載せかけ、補強の粘土をかなり下位まで当てている。非常に軟弱な瓦である。

複弁 I 類(第7図10,図版15の2)老司 I 式と呼ばれているもので確実なものは 1点で、他はい わゆる老司式であるというに止まる。

複弁Ⅱ類 鴻臚館式と呼ばれているもので破片が1点調査地南半第Ⅱ期基壇回りの瓦堆積中



第8図 平瓦, 丸瓦拓影, 実測図



第9図 SB064·065柱穴出土, 瓦の叩き痕など拓影

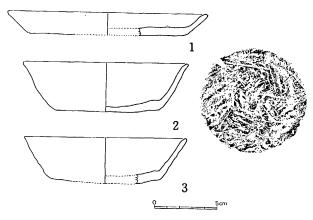
から検出した。

(2)軒平瓦 (第7図11・図版15の4) SB067のトレンチから検出したもので,軒平瓦の顎の部分で接合面が剝がれたものである。指で押え付けた圧痕があるのが特徴であろう。茶褐色の比較的堅い瓦である。

道具瓦(第7図13.14.図版15の5)面戸瓦が2点ある。軟質で灰黒色の瓦で作ってあり、下端部の破片である。

#### 土器 (第10図)

須恵器が3点ある。いずれも遺構からは出土していない。 1は皿の破片,2は杯で、内面を視して使ってあものは で磨滅しており、その部分は がある。のではないのでない。 との視に用いられたもの叩いのでは あろう。底部外面には、叩いて がなる。 になっている。 で文ではなく、意識がでない。 になっているの いるるとしたものでいるのでいるの になっているのでいるのでいる。 は、ではなく、たものでとしたもので



第10図 須恵器実測図

あろうが、具体的にはどのようにしたのかわからない。3も杯である。底部を破損しているが、 2と大差ない形態である。

#### 3. 小 結

大野城跡主城原地区の今回調査地点では、建物が3時期分重複した場所が2ヶ所発見された。これは大野城跡のうちでの初見であり、基壇をもつ建物があったこと、掘立柱の長大な官衙風建物、また掘立長倉風建物、礎石長倉風建物なども同様であって、主城原地区における今回調査地点は、これまでにない変化に富んだ性格を考えねばなるまい。

そこで仮りに南半部のブロックをA区、北半部をB区、主尾根から延びた建物のあるのをC区と呼ぶことにして、問題点をまとめておきたい。

まずA区では4棟分の礎石建物のうち、3棟が同一場所での高い基壇に建てられている。しかも4棟の建物の方向・規模が異っており、最後の3期目の建物は規模が最も小さく方向も前2回とまるきり異っている。SB063建物はこの3期目の建物(SB062)と併存した可能性が考えられる。

SB060	<b>→</b>	SB061	<b>→</b>	SB062	→ SB063
3間×8間?		3 間×5 間		3 間×4 間	3 間×5 間
8尺×8.5尺		7尺×7尺		7尺×6.5尺	7尺×7尺
礎石総柱		礎石総柱		磯石総柱	礎石総柱

第 I 期目の基壇をもつ長大な建物(SB060)の次に第 I 期目に大野城に最も普遍的な 3 間× 5 間の柱間寸法 210cmの建物(SB061)に作り替えられていることと、最も新しい 2 つの建物のうち SB063がまた 3 間× 5 間の大野城では一般的な建物であること、 又SB063が山の傾斜面をかなり削平して建築していることに注目したい。 SB063より古い SB061が大野城において、普遍的な 3 間× 5 間,柱間寸法 210cmの規格的な建物に属することから、この 3 間× 5 間という規格的な建物に少なくとも時期差があることが明らかになったことは重要であり、且つ大野城においてはほとんど地山削平しないものと、山の斜面を大規模に削平して建物を作っているものとがあることが、時期差としてとらえられる可能性を示唆するようにも考えられる。又この SB061建物の版築層と基壇積石の中に縄目と格子目叩きの瓦が散在することは、絶対時期決定のための一つの有力な手懸りを与えているものといえる。

第Ⅱ期建物のSB 061は前期SB 060の北半3間分を縮小して、その基壇を削平しているが、前述したように、SB 061の基壇北辺に階段でないかと考えられる状態の遺構があることと併せ考えると、SB060の削平した部分は、第Ⅱ期以降には広場のような空間となっていたことになる。

Bブロックでの顕著なことがらは、まず博多側への見通しのよい尾根の最先端に、3間×5間の 礎石建物より古く、2時期分の掘立柱建物が重複していることである。また尾根先端中央部に ある掘立柱の櫓と考えられるものの存在にも注目したい。

SB064	→ SB065	→ SB066	· SB068
m × m	$_{ m m} \times _{ m m}$	$m \times m$	m× m
3 間×7 間	3 間×9 間	3 間×5 間	1間×1間
cm × cm	cm× cm	210cm $ imes 210$ cm	
掘立柱	掘立総柱	礎石総柱	掘立柱櫓

大野城における掘立柱建物は,これまでに,猫坂地区に1例ある。これはSB064の掘方と似た状況の掘方をもっていたが,3 間 $\times$  4 間の総柱建物であったし,隣接する 3 間 $\times$  4 間の礎石総柱建物との前後関係は不明であって,併存してもおかしくない位置方向をもっていた。比べて,SB064は総柱(倉庫風)でなく,側柱だけの,普通官衙風,役所風の建物である。また次期のSB065は掘方の規模はやや小さいが,3 間 $\times$  9 間の掘立柱のいわゆる長倉で,掘立柱の長倉もまた極めて類例に乏しい。単に長倉というのであれば礎石のものが基肄城(3 間 $\times$  10間) 輪智城(3 間 $\times$  9 間)にある。

#### 註3. 『特別史跡大野城跡Ⅱ』昭和52年

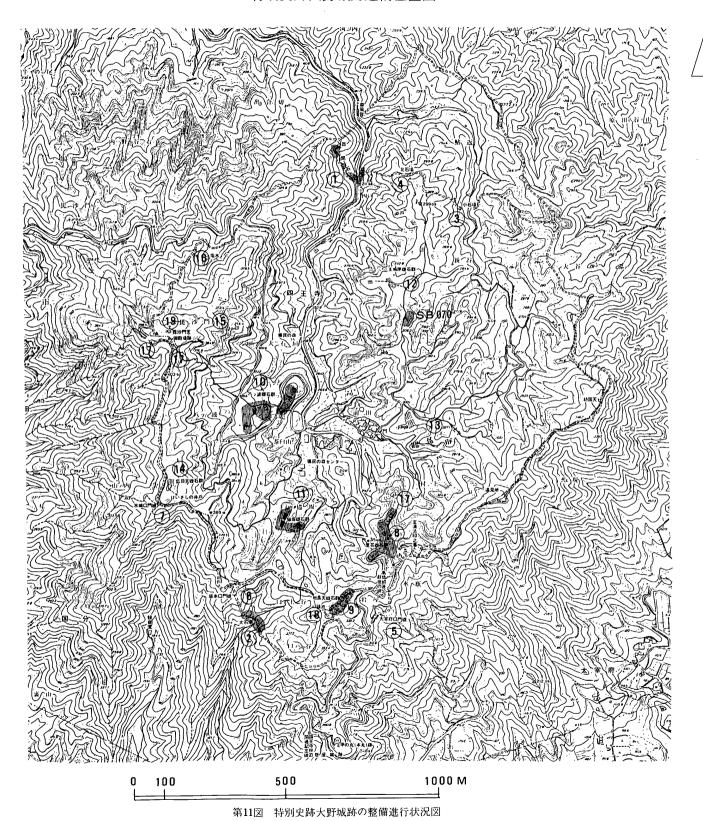
いずれにしても、当時の山城の建物としては類例のないものである。さて、この掘立柱建物が造られた時期を推定する手懸りは、その柱穴から検出した瓦の年代である。前述したようにこの柱穴からはAプロックの第 II 期の基壇周囲から多量に検出した縄目の叩き文の瓦はまったく検出されず、平瓦では格子目の叩き文を有するものやそれをすり消したものなどで、赤褐色・灰白色・青灰白色などという色調は、同出土の丸瓦にも共通している。 SB 064の柱穴で検出の単弁瓦当は同一資料は大宰府史跡他で2点程見られるが、丸瓦との接合技術は単純である。またSB 065柱穴出土の軒丸瓦の瓦当を欠く丸瓦の瓦当と接合するための整形は、各所で発見した単弁軒丸瓦に見られる技術と共通して、両者とも一般に瓦製作技術としては古式を示している。また叩き目の文様が大形の格子目であることも、大宰府史跡などにおける奈良時代以降の格子目の叩き文などとは異るものである。

以上の各瓦の年代論はさておいても、掘立柱の建物の造られた時期は、単弁瓦の作られていた時代であることはまちがいない。又重複関係を併せ考えると、掘立柱建物の造られた時期は、『日本書紀』の記録にある 665 (天智天皇4) 年にそれほどへだたるものではなく、すくなくとも7世紀後半代という大まかな年代観に大きな誤りはないであろう。

## Ⅲ 主城原礎石群整備概要

- (1)礎石建物跡(SB070) 主城原地区に在って北方へ下る尾根筋の中途にあり,尾根の両側は昭和47・48両年度の豪雨時山腹剝落を起しており,そこで植生復原を通じて山腹安定のためへリコプター実播工をおこなっている。また基壇西側は一部礎石際まで崩れ欠壇になっており,そこで平板測量によって礎石位置を図面表示し,基壇範囲を推定した。整備内容は結果的には将来基壇復原が出来るように旧地形復原工事と林道の付替えであり,まず桟道をとりこわし,若干位置を西側にずらして雑割石空積みで積み方は谷積として史跡環境にマッチさせた。また基壇東側は基壇外側に林道設定が出来る程度の余裕はあるものの傾斜面であるので水平削土即ち段切りの上,マサを盛土し土留めの竹柵工を設け,林道を東回りにした(図版17)。
- (2) 説明板設置及び遊歩道整備 宇美町へ通ずる林道の途中(百間石垣の近く)に主城原導入の方向標示板があるものの、主城原礎石群の説明板がなく、ややもすれば見落しがちな導入口であるので、主城原案内図を添付した説明板を一基設け、さらに礎石群散策の利便を図るため部分的ではあるが、遊歩道の開設・里道の下草刈り・岨路の伐開をおこない、所々に階段を設けた(図版18)。
- (3) 伐開事業 大野城に残る遺構を出来得る限り築造当時の状態に戻して遺構の全体像を明確にし、見学者の歴史的対話の手助けを図ると共に文化財保護の基礎的作業を行う目的で、史跡と自然の調和に留意しながら、土塁・石塁・門礎および礎石建物跡等にある潅木等の伐開を行い歴史的景観再現へ努めた。

## 特別史跡大野城跡遺構位置図



## 指定年月日

昭和27. 7. 23 (史)

昭和28. 3. 31 (特)

昭和51. 12. 22 (追)

# 史跡公有化状況

(単位 m²)

		太宰府町	宇美町	合 計
指定	面積	12,601	3, 289, 589	3, 302, 190
買収対和	<b>你面積</b>	7,784	1,446,011	1, 453, 795
買収	面積	0	746,653	746,653
買収	率	0%	51.6%	51.3%

# 整備進渉状況

# 整備済

記号	遺構	規模	整備状況
====	土 塁 線	約8.2km	伐 開
1	百間石垣	約 <b>180</b> m	一部整備
2	大 石 垣	約 <b>65</b> m	"
3	小 石 垣		
4	北 石 垣		
<b>(5</b> )	大宰府口門礎	_	
6	坂本口門礎		
7	水城口門礎		
8	尾花礎石群	10 棟	整備済
9	增長天礎石群	4 棟	"
10	八ツ波礎石群	14 棟	"
11	猫坂礎石群	5 棟	(1棟掘立柱)
12	主城原礎石群	16 棟	53年より整備
13	村上礎石群	10 棟	
14	広目天礎石群	1 棟	
15	御殿場礎石群	2 棟	:
16	屯 水		
17	経 塚	3個所	
18	鏡ヶ池		
19	毘沙門天		

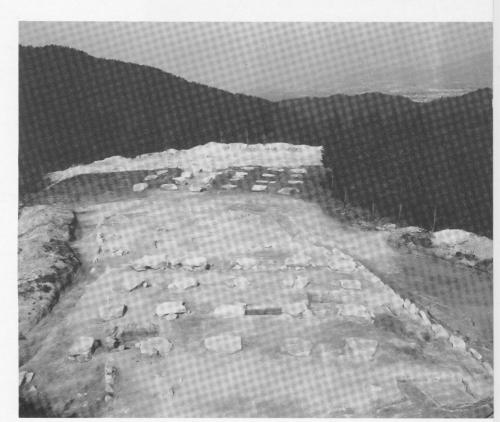
# 図 版



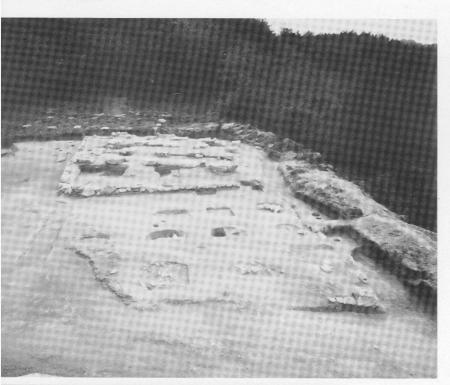
発掘調査区全景(南から)



発掘調査前全景 南から博多湾方面 を望む



発掘調査後(全景) 同上:



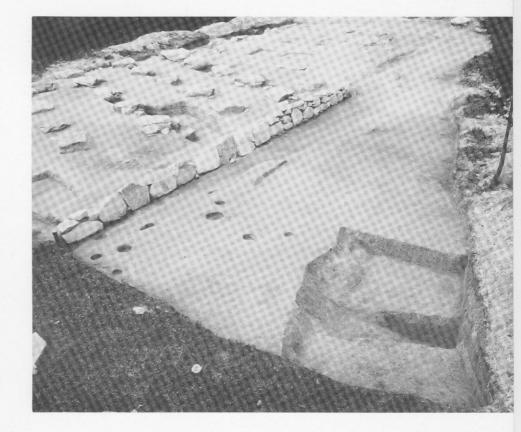
SB063 SB060南 SB061 SB062 SB060北



SB060北基壇西北隅



発掘区礎石建物 (全景)

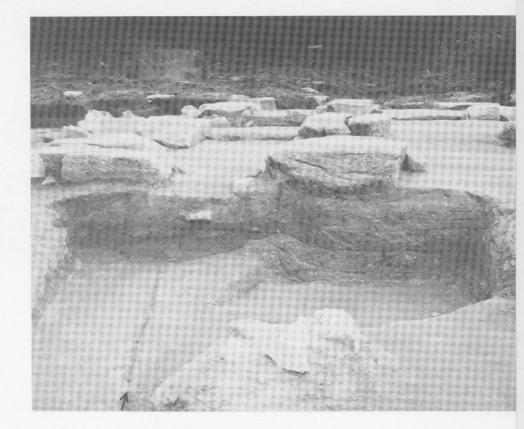




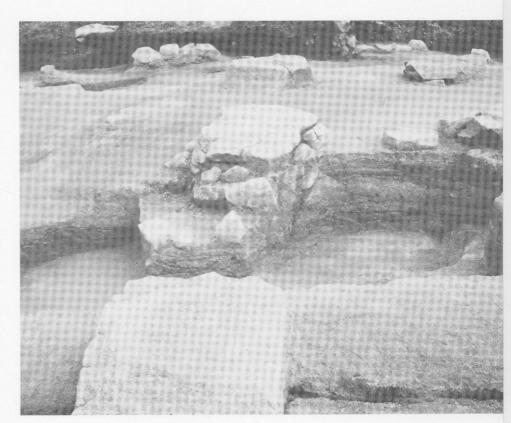
SB061北側基壇と SB062礎石



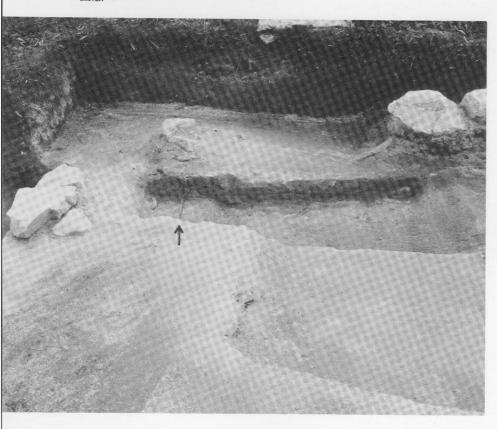
SB061東側基壇と SB062礎石



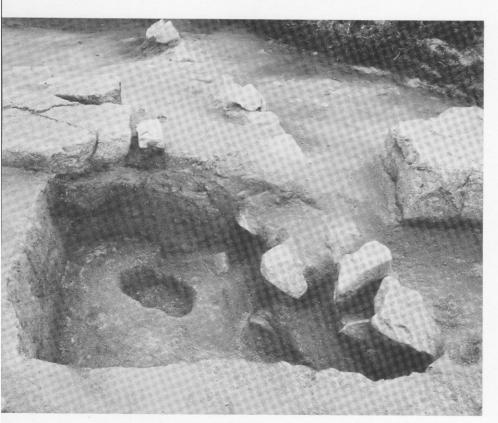
SB060.061 礎石掘方と SB062礎石 手前左端矢印は SB060の基壇縁



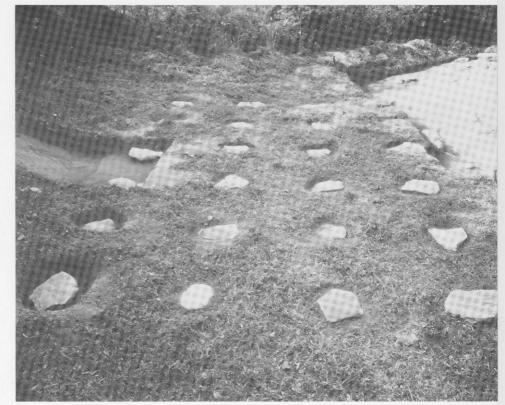
SB060.061 礎石掘方と SB062礎石



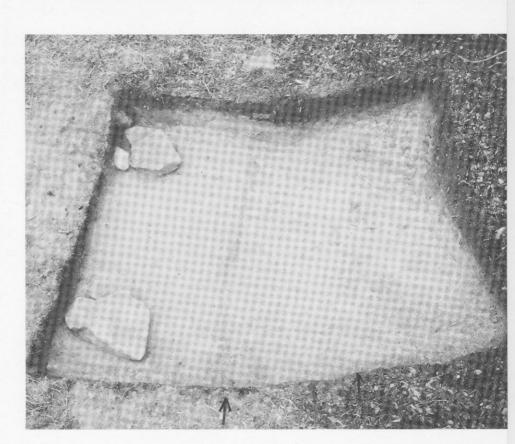
SB061東南部の基壇縁と 中央左の矢印は SB060の基壇縁



SB060 礎石掘方と SB061 西側 基壇及びSB062 礎石



SB063右上部に SB062の礎石がみえる



SB063の南側柱列 礎石と雨落 (矢印の巾)



S B 064 · 065 · 068 掘立柱建物全景



SB064・065・068 掘立建物とSB066礎石建物



SB064·065 掘立柱断面



同上:



S B 066 礎石建物 (全景)



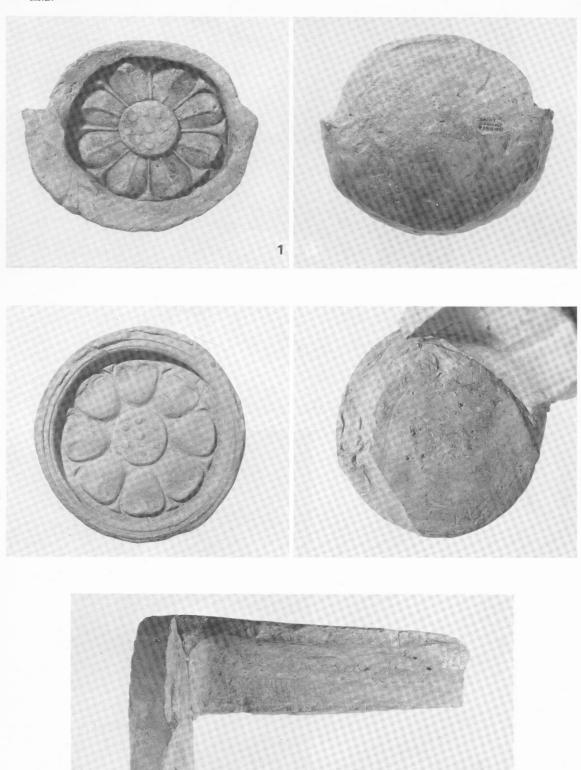
SB066礎石建物 (全景)



SB063礎石建物 (全景)

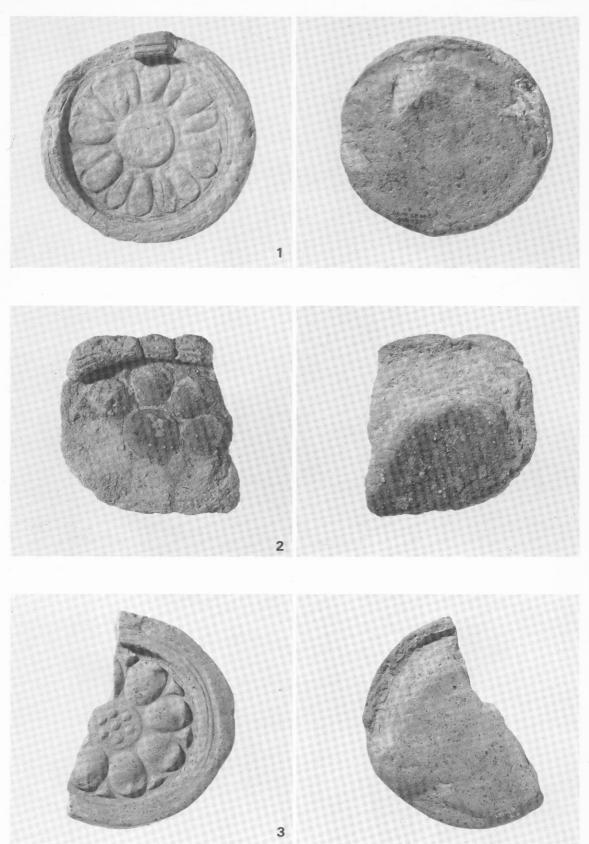


SB063下層遺構検出状況

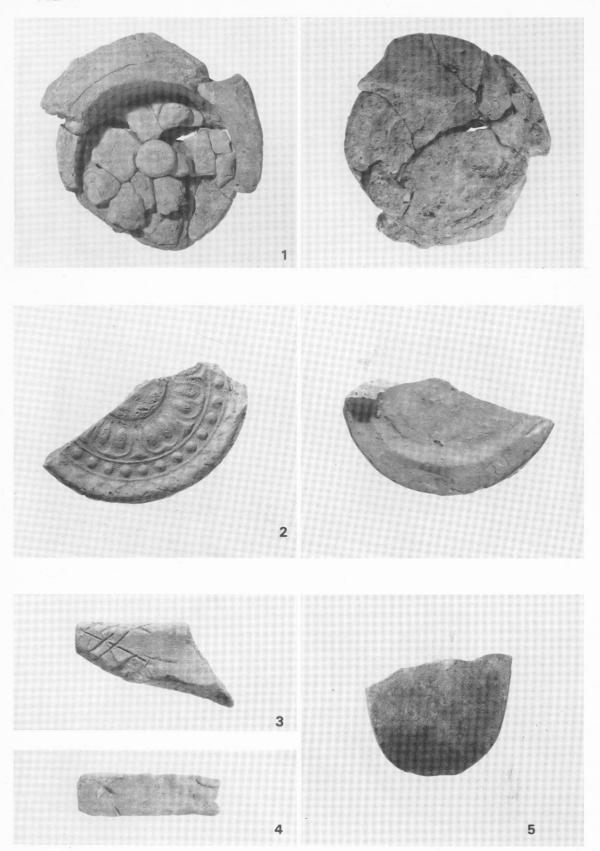


主城原地区出土 軒丸瓦

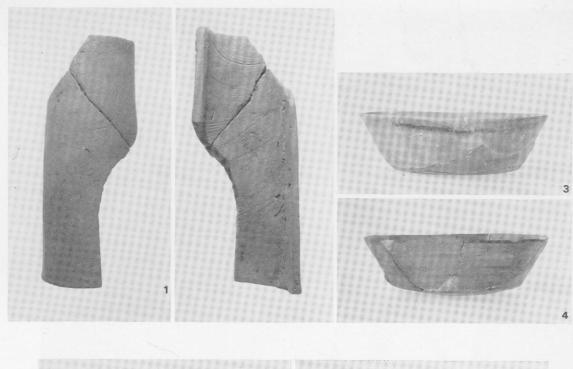
2

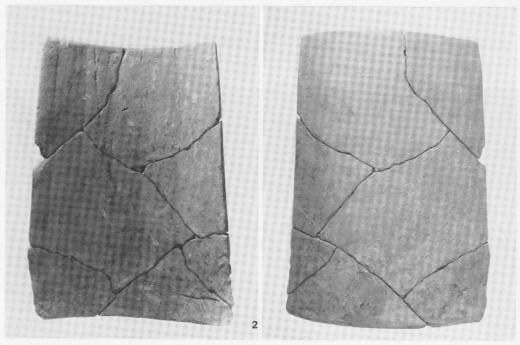


主城原地区出土 軒丸瓦



主城原地区出土 軒丸瓦・道具瓦





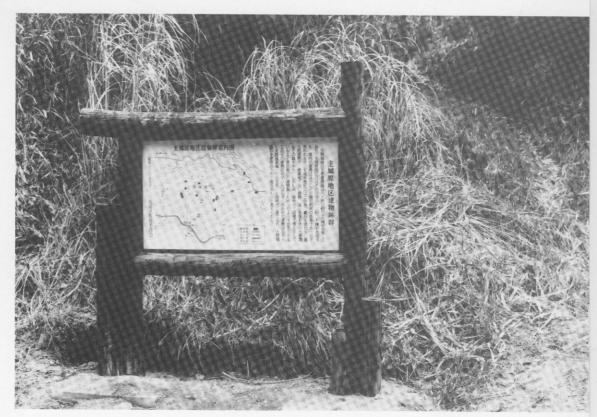
主城原地区出土丸瓦・平瓦・須恵器



礎石建物跡基壇保全工(工事中)



同上 (完成)



説明板



階段工

特別史跡大野城跡Ⅲ 主城原地区建物跡

----史跡環境整備事業に伴う発掘調査概報----

昭和54年3月31日

発行福岡県教育委員会 福岡市中央区西中洲6-29

印刷 栄光印刷株式会社 福岡市東区箱崎下入道800